

「中にはどんなものが詰まっているのだろう」——子どもたちや先生が手に取ったときに、思わず開いてみたくなる。教科書の「顔」ともいえる表紙には、そんな力が必要です。

中学校『美術』教科書では、このような思いのもと、子どもたちの発達段階と各冊の位置づけを鑑みながら、表紙となる作品を選定しました。

『美術1』の表紙は、小誌創刊号でアトリエをご披露いただいた三沢厚彦氏の彫刻。のびのびとした自由な表現に、中学生になったばかりの子どもたちは親しみを感じることでしょう。

『美術2・3上』の表紙は、今号「アトリエ訪問」にご登場いただいた上田薫氏の絵画。より緻密でリアルな世界に一步踏み込んでいきます。

『美術2・3下』の表紙は、今号「作家の肖像」でも取り上げたイサム・ノグチ氏の彫刻。公共の遊具でもあるこの作品は、公共性や表現の抽象性に視点を向けさせます。

教科書は、美術の世界へといざなう扉です。そこに表されたものは、すべてが学習の素材なのです。



『美術1 美術への扉』  
三沢厚彦  
「Animal 2008-01」



『美術2・3上 美術の広がり』  
上田 薫「ジェリーにスプーンC」  
今号「アトリエ訪問」では、上田氏自身が、写実的な絵画制作に取り組むようになったきっかけなどを語っている。



『美術2・3下 美術の力』  
イサム・ノグチ  
「ブラックスライドマントラ」

## 美術準備室 No.2

2012（平成24）年10月23日

発行人 ■ 常田 寛  
発行所 ■ 光村図書出版株式会社  
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9  
電話：03-3493-2111  
http://www.mitsumura-tosho.co.jp  
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp  
デザイン ■ Better Days (大久保裕文+武井糸子)  
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社



特集

## 気持ちを伝える デザイン

アトリエ訪問  
画家

上田 薫

作家の肖像  
彫刻家

イサム・ノグチ

子どもの世界をとらえる  
「のびる影」

放課後ART

- 滋賀県大津市立 瀬田北中学校
- 造形「さがみ風っ子展」

この1点

「ラスコー洞窟の壁画」  
石川直樹





# ア ト リ エ 訪 問

第 2 回

## 上田 薫

画家

写真と見まがうほどに緻密に描く  
「スーパーリアリズム」で一世を風靡した、画家・上田薫。

彼のアトリエは、まぶしい緑に囲まれた、  
鎌倉の小高い丘の上にある。

撮影 永野雅子

部屋に足を踏み入れた瞬間、すがすがしい風が吹き抜けた。窓の外には青々とした鎌倉の山が見え、遠くには鶴岡八幡宮が望める。「子どもの頃から自然が好きでね。ここにアトリエを構えたのは、そんな理由からなんです」。真っ白なエプロンを身につけた上田さんが、にっこり笑った。

——清潔感のあるアトリエですね。ずっと鎌倉にお住まいなのですか。

**上田** ここは4つ目のアトリエです。大学で教えたりもしていましたから、そのときの職場が近いところを転々と。僕は人生なりゆきだと思っていますから、先のことを考えないんです。自宅は8軒も建てました。無駄なことをしたもんだなと思いますよ。でも、美術そのものが無駄なものでしょう（笑）。無駄があってもいいんです。

アトリエは、それなりに整理していますね。僕は「きれい」なのが好きなんです。油絵の具がベトベトし

て汚いのは苦手。作品も同じで、きれいなものを描いています。

——上田さんの作品は「スーパーリアリズム」と呼ばれますが、写実的な絵を描かれるようになったきっかけはなんだったのですか。

**上田** 大学を出てからずっと抽象画を描いていたんですが、あるとき行き詰まってしまって。それで、「とにかく見たままに描いてみよう」と、黒いテーブルに置いてある貝殻を写真のように描いてみたんです。でも、どこかもの足りなかった。

そこで、12号サイズ（60.6cm × 50cm）のキャンバスに、貝殻を宙に浮かせたように大きく描いてみたんです。図鑑みたいだね。それを見たときに「あっ、おもしろいな」と思った。僕は大事な絵は描けないけれど、この絵で「これは貝である」と伝えられる。それも、ただ伝えるんじゃないかって思ったんです。

——確かに上田さんの絵は、一瞬、写真のように見えますが、写真よりも強烈な印象を与えます。

**上田** それは、描いた「モノ」としての迫力じゃないでしょうか。写真という印画紙ではなく、キャンバスに絵の具を塗った「モノ」に、人は迫力を

感じるのかな。僕がどんなに緻密に描いても、写真の10分の1ぐらいの情報量しかありません。でも、それが人間の目にどう映るかは別問題。情報がありすぎると、見えなくなるものもあると思うので。

——今回、『美術2・3上』の表紙に、「ジェリーにスプーンC」が掲載されています。上田さんは「ゼリー」「生卵」「水の流れ」など、みずみずしいモチーフを描かれることが多いですね。

**上田** みずみずしさというより、僕は「光るもの」が好きなんですよ。

光っているのを見ると、単純に「きれいだな」と思う。

僕の作品を見て、みなさんはいろいろな解釈をしてくれるでしょう。でも、僕自身は何も考えていないんです。「ああ、きれいだな」と身体で感じたものを、ただ描いているだけ。芸術論のようなものは好きじゃないから、難しく考えずに、ストレートにきれいだと思ったものを描く。描き始めたら、お坊さんが写経しているような気分ですよ（笑）。だからね、こういう自然が多くて、静かなアトリエが僕には合っているんです。



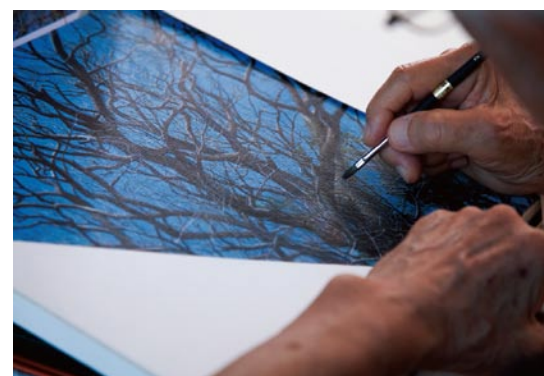
壁際には、インドネシアで買ったお土産が並ぶ。旅先で絵のモチーフに出会うことも多いそうだ。



自然光がたくさん入る解放感のあるアトリエで、自由闊達に話す上田さん。



うえだ・かおる  
1928年東京都生まれ。  
東京藝術大学油画科卒業。  
グラフィックデザイナーとして活躍し、  
デザイン会社を設立。  
70年に描いた「貝殻」をきっかけに、  
「スーパーリアリズム」と  
呼ばれる写実的な画風で  
世に知られるようになる。



現在制作中の作品。「最近は、生命力を感じるものにひかれます」。



## 誰に贈る？

明るい陽ざしが降りそそぐ町田第二中学校の美術室には、始業前から多くの生徒たちが集まる。楽しそうに話したり、じゃれ合ったりしていて、実ににぎやかだ。

今回の授業では、教科書（『美術1』）P30-31に掲載されている「飛び出すカード」をつくる。小山先生は生徒たちに、次のように切り出した。

「1年A組になって、数か月が経ちましたね。いちばん初めの授業では、名刺をつくったけど、覚えているかな。まだよく知らない子に『初めまして』と、自己紹介代わりに名刺を渡しました。今回は、親しい人のためにカードをつくります。仲良くなったクラスの子にあげてもいいし、家族や学校の外の人に贈ってもいいですよ」。

続けて、先生は「これは美術館で買ったんだけど……」と言いながら、マッシュー・ラインハートのカードを取り出し、開いて見せた。「みんなには、こういう『飛び出すカード』をつくってもらいます。カードを開くと、ゆっくり花が開きますね。形だけでなく色にも注目。葉が緑で、花が紫色だよ。この色遣いは、前に学習した『補色』の組み合わせです。このカードは、形や色を計算してつくられているんです。では、教科書の30～31ページを開いてください」。

そして、教科書に掲載されている花束のカードを見せながら、「これはなんのカードだろう」と問いかけた。生徒はすかさず「バースデーカード！」と答える。



撮影 鈴木俊介

## 特集

## 気持ちを伝える

## デザイン

中学校では色や形の性質を理解したうえで、より明確な意図でデザインし、作品として表現することが求められます。本特集では、小山一雄先生の「飛び出すカード」をつくる授業をご紹介します。自分のメッセージや思いを伝えるために、生徒たちはどのようにカードをデザインし、制作していくのでしょうか。



マッシュー・ラインハートの「飛び出すカード」を見せながら話す小山先生。



教科書にはさまざまな作例が紹介されている。

## 授業レポート

心を込めて  
「飛び出すカード」を  
つくろう！

東京都町田市立  
町田第二中学校  
小山一雄先生 × 1年A組 (生徒数32名)



「そうですね。これはバースデーカードだから花束が飛び出すようになっている。誰にどんな気持ちを伝えたいかで、何が飛び出すかわわってきそうだね。食いしん坊の子にプレゼントするなら、好きな食べ物が飛び出すなんていうのもいいかもしれない。次の時間までに誰にどんなカードを贈るか考えておいてください。今日の授業では、どうやってつくれば飛び出すのかを、試作したいと思います」。

### 試作してみよう

先生はそう話し、小さい画用紙を2枚配布した。1枚は台紙で、もう1枚は切ったり折ったりする紙だ。



「どう？ うまくできている？」。友達と相談しながら試作する。

そして、教科書P 30の右下にある「飛び出すカードの構想を練ろう」を参考にするよう告げ、実際に目の前で紙を切って、実演して見せた。

さらに、「これも参考にしてみても」と、幼児用の「飛び出す絵本」を各グループに配布。生徒たちからは「わーっ、かわいい」「こんなのつくってみたい」などの歓声が上がった。

それから、試作がスタート。「飛び出す絵本」を何度も開いたり閉じたりしながら、飛び出し方を確認する子、とりあえず紙を切って折りながら考える子、隣の子に相談しながら作業を進める子……それぞれが自分なりの方法で試作していった。そして、授業は終わりの時間に近づく。



「飛び出す絵本」を何度も開いて、飛び出し方を研究。

「では、みなさん、ちょっと手を止めてください。メモしてほしいことがあります。『飛び出すカードづくり 三つのポイント』です。いいですか。①絵の具やペンは使わない。……字や絵をかいてはいけません。すべて紙を切り抜いてつくります。②色の紙を組み合わせる。……教科書の花束のカードのように、いろいろな色を使ってつくりましょう。③誰に贈るか決める。……いちばん大事なことです。次の時間までに渡す相手を決めましょう。そうしないと形が決まらないからね。次の時間では、カードづくりの本番に入ります」。

次時への期待が高まったところで、終業のチャイムが鳴った。

### 授業展開 (全4時間) 生徒の活動

#### 第1時 導入

- 「飛び出すカード」や「飛び出す絵本」を見て、作品制作のイメージをもつ。

#### 構想を練る

- 画用紙を使って試作し、構想を練る。

#### 第2・3時 制作

- 紙の特徴を生かし、形や色を工夫しながら、立体的に「飛び出すカード」をつくる。
- 自分が伝えたい思いを考え、受け取る相手はどう感じるか想像しながらデザインをする。

#### 第4時

#### 発表・鑑賞

- 自分が制作した作品の紹介をする。
- 他者の作品を鑑賞し、そのよさを味わう。

#### 第2・3時

### 心を込めてつくろう

「さあ、今日からいよいよカードづくりの本番です。みんな、誰に贈るか決めましたか？」。先生がそう投げかけると、生徒たちは、「同じ部活の友達」「顧問の先生」などと元気よく答える。

「何も言わなくても、渡しただけで気持ちが伝わるような、そんなカードをつくれたらいいですね。感謝の気持ち、お礼の気持ち……相手へ伝えたい思いを込めてつくりましょう。それでは、色画用紙を準備しましたので、何枚でもいいから選んでつくってみましょう」。

先生は10色の色画用紙をずらっと並べた作業台の前に生徒を集める。「わーっ！ この色すてき」「どの色を使おうかな」。色とりどりの紙を前に、生徒たちは一気に盛り上がる。

紙を選んだ生徒たちは、さっそく手を動かし始めた。黙々と作業を進める子、「誰に贈るの？ 私はね……」と周りの子と話しながらつくる子、「こうしたらうまくいくよ」と友達に教えながらつくる子など、さまざま。

先生はその間、教室内を回り、生徒の質問に答える。でも決して手取り足取り教えるわけではない。「ここを切ったらいいかもね。あとは自分で考えるんだ」、「ここに違う色を入れたらきれいかもね」、「カードの外側の部分は、もっと工夫できるはずだよ」。生徒への助言は最小限。基本的に自分自身で考えるよう促す。

また、合間に制作過程をデジタルカメラで撮影し、モニターで大きく映し出して見せる。友達の制作の様子を知ること、生徒の創作意欲を

刺激するためだ。

カードができあがるにつれ、「先生、見て！」と、うれしそうにカードを開いて見せる子や、「かわいいねえ」と友達のカードを手取る子が現れ、教室はどэндんにぎやかになっていく。

「次の時間では、一人ずつ作品を発表してもらいます。誰に贈るのか、どんな思いを込めてつくったのか、みんなに話してくださいね」。



細かいパーツを丁寧にのり付けしていく。



贈る相手を決め、思い思いに作業を進めていく。友達どうして教え合う姿も見られ、教室はにぎやかだ。



#### 特集



気持ちを伝えるデザイン



## 自分の作品を語ろう

今日は自分がつくったカードを発表する日。授業の冒頭では、ワークシートが配られた。「カードの特徴」「制作時に苦労したこと」「渡す相手」「どんな気持ちを込めたか」など、発表する項目が書かれた「発表原稿」となるシートだ。生徒たちは、真剣に原稿をまとめ始めた。

「それでは、いよいよ発表に移ります。みんな、発表のときに気をつ

けることはなんですか」。先生がそう投げかけると、生徒からは「声を大きく」「落ち着いてはっきりと」「内容が伝わるように話す」などの、注意点が挙げられた。

カードを持った生徒を撮影した画像をモニターに映し、その前で発表を行う。一人あたりの持ち時間は1～2分だ。発表を聞いて初めて、どんなカードをつくったのかわかる生徒も多い。例えばO君（写真左）。カードの内と外には、小さな正方形の紙が貼られている。

「鉄道好きのH君に贈るカードです。」



ピッチャーを目ざすK君。ストレートなメッセージを表現した。

ならきっと気づいてくれるだろう。

いっぽう、ストレートなメッセージをカードに込める子もいる。K君（写真右上）は野球部。「ピッチャー やらせてください」という文字と飛び出すボールを見ると、彼の直球な思いが伝わってきて、思わず笑みがこぼれてしまう。

「今のいちばん強い思いを表したカードです。渡す相手は顧問の先生。自分の気持ちに気づいてほしいから。ボールがどうやったら立体的に見えるか、すごく考えてつくりました」。

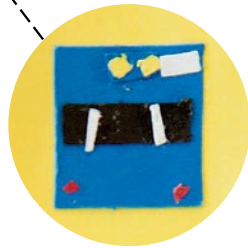
どの生徒も、照れながら自分のカードを大事そうに手にし、発表をしていく。聞く側の生徒のまなざしも優しく、教室は温かい空気に包まれていった。そして、全員の発表が終わり、先生はこう語りかけた。

「みんな、素晴らしい『飛び出すカード』がつくれましたね。2年生になったらもっと上手につくれるかもしれません。でも、1年生の『今』の気持ちを込めて一生懸命つくった、そのことがとても大事だと思います。上手・下手でなく、気持ちが込められているかどうか、いちばん大事。相手に渡すのは少し照れくさいかもしれないけど、心を込めたカードだから、必ず手渡してくださいね。きっと相手も喜んでくれるでしょう」。

先生の話聞きながら、生徒たちはつくったカードを愛おしそうに眺めていた。



大きく映し出された画像の前で発表する。将来の夢は新宿駅の駅長だと語るO君。カードの外側に、車両の「顔」を配置した。



この一辺2センチの正方形は、歴代のJR京浜東北線と総武線の車両の『顔』です。そこに貼り付ける前照灯と後照灯をカッターで切る作業が細かくて苦労しました」。

そう言われてみると、小さな正方形が電車を正面から見たときの「顔」に見えてくる。また、車両ごとに微妙に表情が異なる。彼の細かいこだわりは、同じ鉄道好きのH君



仲良しのクラスメートとカードを交換。

# カードに込める、さまざまな思い

相手が好きなものをつくって贈ろうとする子、相手へのメッセージを表現しようとする子、自分が好きなものをつくってそれを理解してくれる人に贈ろうとする子……生徒がカードへ込める思いはさまざまです。ここでは特に印象的だった3名をご紹介します。



気持ちを伝えるデザイン

Aさん  
相手が好きなものをつくる



学級委員を務め、しっかり者のAさん。お兄さんが好きな「花火」をテーマにすることを早々に決めた。

お兄ちゃんへ  
受験勉強がんばってね



手先が器用なAさんは、細かい作業が得意。花火を見上げる人々を小さなパーツで表現していった。



受験を控える3年生のお兄さんへプレゼント。はにかみながら受け取ってくれた。

T君  
自分の思いを伝える  
ためにつくる



家族と仲良しのT君。「お父さんとスカイツリーへ行きたい」という思いを表現することにした。

お父さんへ  
スカイツリーに連れて行って



先生に相談するT君。雲に隠れたスカイツリーと、展望台から見下ろした隅田川と東京のビル群をつくることに決めた。



「お父さんに『いっしょにスカイツリーへ行こう』と言って、渡します」。

F君  
自分と向き合っ  
てつくる



トランポリンの全国大会に出場するF君。テーマはやはりトランポリンで、贈る相手はコーチ。

コーチへ  
オリンピックを目ざします!



作業が思うように進まない。ふだんはあきらめの早いF君だが、今回は大好きなトランポリンがテーマだけに、粘り強く取り組む。



最終的に五輪を作った。いつか自分が出場するという決意を込めて、コーチへ渡す。





T君→お姉ちゃんへ

「最近、忙しくて元気がない姉に渡します。これを見て笑顔になってほしい。自分が獅子座で、ライオンが好きなのでつくりました」



Gさん→親友へ

「友達が大好きなアイドルグループ『嵐』をテーマに作りました。これからもよろしくね、と言って渡したいです」



S君→転校する友達へ

「モスクワに転校する友達に贈ります。今までありがとう、僕と遊んだことを忘れないでね、という気持ちを込めました」

わたしから  
あなたへ  
今の思いを込めた  
カード



K君→両親へ

「夏らしいカードを作りました。いつもありがとう、と言って親に渡します。喜んでほしくて、がんばって細かい作業をしました」



Sさん→幼い弟へ

「木を飛び出すようにするのが苦労しました。動物が好きな小さい弟に渡します。楽しい気持ちになってくれるといいな」

カードの外側にもひと工夫



P 7で紹介した A さんの作品。  
カードの外側もかわいらしく  
デザインされている。

## 授業を終えて

——大事なのは  
「表現しようとする気持ち」

私は「どうやったら飛び出すカードがくれるのか」というテクニックを、子どもたちに細かく教えることはしませんでした。自分自身で考えて、答えを見つけていってほしいからです。結果的に、子どもたちは、友達に相談したり、教科書や「飛び出す絵本」を参考にしたりしながら、自分なりに考えて制作していました。

美術では、作品のできばえに目がいきがちですが、私が授業でいちばん大事にしているのは、「表現しようとする気持ち」です。子どもが自身を見つめ、自分の気持ちを作品にどう表現するか、試行錯誤しながら考えて制作することが重要だと思っています。

今回、発表を聞いて、「そんなことを考えていたんだ」と、驚きや発見があって、とても楽しかったですね。子どもたちも、互いへの理解が深まったんじゃないでしょうか。

自分を表現したいと思うことができ、さらに周りの人たちへの理解を深めることができる——美術の授業がそんな時間になったらいいなと、私はいつも思っています。(談)



小山一雄 こやま・かずお

1953年神奈川県生まれ。和光大学人文学部芸術学科卒業。町田市立町田第二中学校主幹教諭。東京都教職員研修センターが主催する「東京教師道場」で、芸術班(美術)リーダーを務める。第29回東京都中学校美術教育研究大会第7ブロック町田大会 実行委員会事務局局長。版画教育研究会(町田)世話役も務める。

## 授業を参観して

光村図書中学校『美術』の著作者である上野行一先生に、今回の授業を参観していただきました。



上野行一  
うの・こういち

1952年大阪府生まれ。帝京科学大学教授。大阪教育大学大学院修了。広告デザイナー、公立学校教諭、高知大学教育学部教授を経て2010年より現職。2008年より発足させた「美術による学び研究会」主宰者として、全国で活動の輪を広げている。著書に『まなざしの共有』(監修・淡交社)、『私の中の自由な美術』(光村図書)など。

## 「デザインは 人ともとの関係を考え、 人と人をつなぐもの」

小山先生が授業された「飛び出すカード」は、学習指導要領のA表現(2)で示されているデザインに表現する活動、およびA表現(3)に関する内容の授業です。

今回の改訂では、表現活動を通して育成する資質や能力が「発想や構想の能力」と「創造的な技能」とに整理されました。A表現の内容は絵や彫刻、デザインや工芸の活動それ自体ではありません。「表現する活動を通して」とあるように、絵や彫刻、デザインや工芸は学習の手段であることを十分理解することが大切です。

そのうえで「(1) 感じ取ったことや考えたことなどを基にした発想や構想」と「(2) 目的や機能を考えた発想や構想」の違いをわきまえて、指導計画を練る必要があります。

授業の導入段階で小山先生が「いちばん感謝している人は誰でしょうか」と問いかけました。さらに「どんな友達がいるでしょう」「受け取った側はどんなカードを受け取ったらうれしいでしょう」などと、「誰に」「どんな気持ちを」という発想に関わる問いかけを次々としています。また受け取る側の気持ちを考えることへも言及しています。これらの問いかけは、授業のねらいが(2)にあることを明確にし、生徒たちに意識づけるために意図されたもののなのです。

この後、小山先生は「今日は試作します」と言い、飛び出す仕組みの基本形を提示しました。ここまでの

指導過程を整理すると、次のようになります。

- ①「目的や機能を考えた発想や構想の能力」を育てる手立てとして  
・贈る相手を明確にし、その人にどんな気持ちを伝えるかを意識づける。
- ②「創造的な技能」を育てる手立てとして  
・飛び出す仕組みの作例を提示し、試したり考えたりさせる。

基本形を試したり、試作したりして飛び出すイメージを思いつくるのはよいのですが、例えば「カエルが口をパクパクしているみたいでかわいい」と思って「飛び出すカエル」をつくろうと発想し、形や色を工夫して仕上げたとすれば、これは授業のねらいに沿った活動にはなっていません。この生徒は発想や構想の能力ではあっても、(2)ではなく(1)のほうの能力を発揮して表現したことになるからです。

生徒たちが授業のねらいを十分に理解し、「誰に」「どんな気持ちを」ということを意識しているかどうかを、机間指導で個別に確認することが大切になります。

小山先生は、ボールが飛び出してくるイメージを形にしようとする組み合わせるが、「誰に」「どんな気持ちを」が明確でない生徒に対して、「ボールが飛び出してくる、このボールを誰にあげたい?」「誰に贈るかでつくるものが変わってこない?」などと言葉がけを行っていました。

デザインの授業では、デザインを単にものをつくることと捉えるのではなく、人ともとの関係を考え、人と人をつなぐものと捉える視点が大切です。

特集



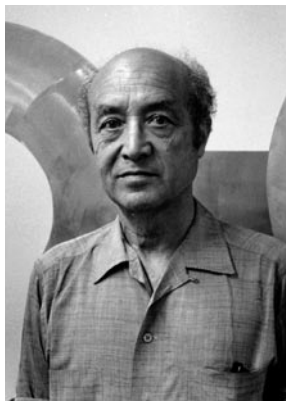
気持ちを伝える  
デザイン



# 作家の肖像

## 第 2 回

このコーナーでは、  
毎回一人の作家を取り上げ、  
美術評論家の酒井忠康先生に、  
お話をうかがいます。



1904-88  
イサム・ノグチ

イサム・ノグチ  
1904 年、英文学者で詩人の野口米次郎と、アメリカ人の作家レオニー・ギルモアとの間に生まれる。少年期は日本で育ち、1918 年にアメリカへ渡る。彫刻家を志し、アジア・ヨーロッパを旅して見聞を広め、パリでは彫刻家ブランクーシの助手を務める。ニューヨークに居を定め、肖像彫刻、舞台美術を経て環境彫刻やランドスケープ・デザインまで幅広く活動をする。彫刻、モニュメント、環境設計を続け、「地球を彫刻した男」と呼ばれる。

## 鋭いユーモアのセンス

今から 26 年前、私がヴェネツィア・ビエンナーレで日本館のコミッショナーを務めたとき、イサム・ノグチはアメリカ代表として、アメリカ館の展示を任されていました。アメリカ館には、彼による数々の彫刻が庭石のように配置され、和紙を使った照明器具「あかり」が天井からつるされていました。あるとき、ノグチは、私のいる日本館にふらっと立ち寄り、「(アメリカ館は) 日本館より日本らしいだろ」と、早口の英語で言い、ニヤリと笑って、颯爽と立ち去っていきました。彼は、そうやって、いつも冗談交じりにドキッとすることを言う人でした。ノグチはとてもユーモアのセンスのある人です。ただし、そのユーモアは底抜けに明るいものではなくて、鍛錬された言葉から生まれる、刃物のように鋭いものでした。

## 日本への思い

ノグチは、日本人とアメリカ人の間に生まれ、波乱に満ちた人生を送りました。2 歳から 13 歳までを日本で過ごしますが、日本での思い出は決してよいものではありませんでした。いわれのない差別を受け、日本人である父からは拒まれ、孤独を味わいます。しかし、彫刻家として始動するときに、「イサム・ギルモア」というアメリカの姓でなく「イサム・ノグチ」という日本の姓をあえて選んだ。そこには、憧れにも似た父への思い、そしてやはり日本への強い思いがあったのでしょう。

彼の彫刻には、根底に「日本の庭」の考え方があると思います。日本の

庭は、庭師がデザインした時点で完成するのではなく、その後、自然によって長い時間をかけてつくられていく。そういう深遠な自然観が彼の彫刻にも見られます。ノグチは、作品「スライド・マントラ」について、「この作品は 100 年後に完成するだろう」と語っていますが、これはまさに、日本の庭と同じ考え方だと思います。

## とんでもない天才

彼の作品には、異質なものが見え、ぎ合っているような、衝突しているような、不思議な緊張感があります。それは、彼が日本とアメリカという二つの故郷をもつことや、孤独な生い立ちであることが関係しているのかもしれませんが。私は、とても温かみのある「あかり」ですら、静謐な緊張感が漂っていると思います。

そして何より、ノグチの作品は観る者に力を与えます。例えば、モエレ沼公園。あそこにある山に登って、「雲よ、動け!」と言ったら、雲が動きそうな気がするでしょう (笑)。そんな圧倒的な力が、彼の作品にはあるんです。

ノグチは、ピカソと並ぶぐらいの、とんでもない天才です。彼の作品を観ていると、「彫刻とはなんだろう」「空間とはなんだろう」という問いが次々と生まれてきます。そういう原点的な問題を突きつける、数少ないアーティストの一人だと、私は思います。(談)

### 酒井 忠康

さかい・ただやす  
世田谷美術館館長、美術評論家。  
1941 年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。  
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。  
平成 24 年度版光村図書中学校「美術」代表著者。



上／モエレ沼公園  
2005 年 北海道札幌市  
ノグチが基本設計を行った公園。その壮大さには目を見張るばかりだ。  
左下／「ブラック・スライド・マントラ」  
黒御影石 高さ 360cm 1988 年 北海道札幌市  
ヴェネツィア・ビエンナーレには、白大理石の「スライド・マントラ」が出品された。札幌市にあるのは黒御影石でつくられたもの。(撮影 綿引幸造)  
右下／「あかり」展示風景  
モエレ沼公園内のガラスのピラミッドでの展示。  
ノグチは「和紙が生む光の彫刻」として、「あかり」を連作した。



# 子どもの世界をとらえる影

第1回

このコーナーでは、教科書に掲載されている生徒作品を取り上げ、奥村高明先生に、その作品の見方や考え方（※1）などを紹介いただきます。

**奥村 高明**  
おくむら・たかあき  
聖徳大学児童学部教授。  
1958 年宮崎県生まれ。  
小・中学校教諭、美術館学芸員の後、  
文部科学省教科調査官として  
学習指導要領の作成に携わる。  
専門は図画工作・美術教育、  
鑑賞教育など。芸術学博士（筑波大学）。  
『子どもの絵の見方～子どもの世界を  
鑑賞するまなざし～』（東洋館出版社）、  
『美術館活用術』（美術出版社）など、  
著書多数。

## 「描かれた事実」と「解釈」に分けて見る

この絵には、山形県の「第50回記念県こども絵画展覧会（こども県展）」（2008年）の審査で出会った。何か引っかかった。なぜだろう？ その引っかかりを解明するために、いつも順序良く絵の部分を見ていくことにしている。その際、「描かれた事実」と見る側の「解釈」を丁寧に分ける。「描かれた事実」を根拠にすることは「描いた当人の事実」を尊重することになるし、見る側の好みや審美眼を根拠にした「上から目線」や大人の「思い込み」（例えば児童画らしさ！）を防ぐことにもつながるからだ。子どもの絵を見るということは、子どもの身と自分の身を重ねる行為である。この作業をしていると、しだいにこの子の視線に自分の視線が重なっていくような気持ちになる。

結果的に、私はこの絵から、右ページの1～4のように考え、この絵は、この子の「身近な風景からの発見」だと判断した。

### 「引っかかり」の理由

審査のときは毎回そうだが、選ぶかどうか、相当悩む。「先生のアイデアかもしれない」「先生が写真を撮ってきて『これ描け』って言うているかもしれない」「同じ絵が多量にあるかもしれない」「私の不勉強ではないか」……でも自分の解釈を信じて、でもたいていは「ええい、ままよ！」という気分で選ぶ。ともあれ、この作品を、この年の県展賞に選んだ。

後日、「こども県展」で最終審査者が受賞者を対象にギャラリートークをするという企画があった。そのとき中学3年生の作者に会い、おお

むね私の解釈が妥当だったことがわかって安心した覚えがある。

さらに今回、この企画で大学生になった作者と再度会って、じっくり話をすることもできた（※2）。以下は、そのときに本人が語った内容である。

「この絵は、夏休みの宿題だったんです。好きな風景を選んで描いて提出しないといけなかったので、デジカメを持って、町内を自転車で駆け回りました。土手や家など100枚近く撮りました。そろそろ陽が傾いたし帰ろうかなというとき、家の近くを走っていたら、「あっ、影が描ける」と思い、自転車をこぎながら何枚か撮りました。タイヤの下が切れているのはそのせいです。この場所は通学路ではないけれど、小さい頃から何回も何回も通っている場所です。

影を灰色や群青色で描いたのは、先生が『世の中に黒という色はない』と言っていたのを思い出したからです。道路はざらざらしているので、ベタ塗りにはしませんでした。でも水彩絵の具の使い方は苦手だから雑になっています。

その後、先生が県展に出す絵に選んでくれ、『田んぼは、もっと葉っぱの感じを出したら』などのアドバイスもしてくれました。それで、田んぼの表面の部分を描きこんだり、雲の感じやビニルハウスの表面の光っている部分を描いたりしました。

道は家の近所だが、通学の一場面ではなかった。県展に出すことを決めたのは先生で、そこから加筆している。田と道路の段差の部分の表現は苦労したようだ。両端から中央に向かって伸びる線はあぜ道ではなく、電柱の影だった。やはり絵から分か

私はこの絵を、次の1～4のように「描かれた事実」と「解釈」に分けて、見ていった。

**1 事実** 私はこのような絵を見たことがない。審査会場に類似の絵がない。  
**解釈** この作品の主題は子ども自身が決めたのではないか。先生の指図で描かれたものではないだろう。

**2 事実** 田の表現、田と道路との段差、筆の遣い方につたない部分がある。  
**解釈** 筆遣いに慣れた美術部の作品ではないだろう。普通の生徒が授業の課題か夏休みの宿題かで描いたのではないか。

**3 事実** 影が大きく伸びている。影の向こう、画面右上に小さく山が見える。ビニルハウスもある。少し斜めになっていて、わずかに上部は曲線になっている。  
**解釈** 影の伸びの比率が正確で（数学を思い出して!）、画面手前から山まで破綻がない。上部の曲線はカメラのあおりではないか。人間の目でとらえられない部分があり、また写真を分割して拡大したような鉛筆の跡もある。おそらく写真を撮ってそれを見て描いたのだろう。

**4 事実** 自転車の形がシンプルで、短パンのような服を着た影、その向こうに田が広がっている。  
**解釈** 学校の授業で描けるような場所ではない。この子の住んでいる場所（米どころ山形!）だろう。作者は通学用の自転車に乗って毎日この道を通って、田が青くなったり、黄色くなったりする光景を見ているのだろう。そんなとき、何気なく道を見つめたら、自分と自転車の影が、道路から田まで伸びていた。それがおもしろくて、それを描こうと思った。つまりこの絵は「身近な風景からの発見」ではないだろうか。



「のびる影」  
紙 水彩 38×54cm 『美術2・3上』P15に掲載

るのは1割、解釈の間違いも多い。でも、すてきな絵に出会えた。先生の適切な助言があることもわかった。縁があって本人と話もできた。何より、私の「引っかかり」の理由は、この生徒自身の「発見」だったことが確かめられた。この絵を描いてくれた子ども、選んでくれた先生、「こども県展」、みんなに感謝である。

※1 作品の見方といっても1割もわかりはしない、と私は考える。認知り顔で分析したり、発達論や心理学をもっともらしくもち出したりしても、子どもの思いには届かない。子どもは大人もかなわぬくらい深いことを考えている。

※2 子どもは自分の絵を前にすると、さっき描いたばかりのように細かく思い出して語ることができる。この絵も描いて4年経っていたが詳細に語ってくれた。記憶は、絵と人の間にあるのだろう。



# 美術部へようこそ! ● 滋賀県大津市立瀬田北中学校

今回、登場するのは、滋賀県大津市立瀬田北中学校美術部。  
制作中、明るく声をかけ合う姿が印象的な美術部が、  
ふだんから大切にしていることを中心にお伝えします。

## 教え合いのある美術部に

放課後の大津市立瀬田北中学校、  
美術室前の廊下には、油絵を載せた  
イーゼルがずらりと並ぶ。真剣な面  
もちでそれぞれの作品に向き合うの  
は美術部の部員たち。同校美術部は  
女子 36 名の部員で構成される。

「上下関係はあまり感じたことが  
ない。仲のよい部だと思う」という  
2 年生の部員の言葉どおり、制作の  
合間に声をかけ合う姿が見られ、個  
別の作品に取り組んでいても、部の  
連帯が感じられる。

顧問の梶岡 創 先生は語る。「美術  
部というのは、運動部のように先輩・後輩間での『教え合い』が生まれにくい部活動だと思います。でも、せっかくここに所属してみんなで活動しているのだから、お互いに教え合っていける部であってほしい」。思案の末、考えついたのが、「ミニテクニック」の課題だった。「落ちた水滴がぶるぶると震えながらとどまる様子を描く」などといった、いわば「小技」の手法がいくつも収められたファイルが用意しており、部員は、そこから選んで課題に取り組む。

先輩が過去に経験した課題に後輩が挑戦することになるため、自然に、「自分はこうした」という助言が発せられるようになるのだという。

「さらに、部員として活動していることを見せるという意味を込めて、毎月 1 回、その間に制作した作品を部内で発表し合う『鑑賞会』を設けています。他の部員からのコメントも求めるけれど、大切なのは、『この 1 か月、美術部員としてこれだけ活動したんだ』ということをもんな



運動部の活動の様子をかたどり、パステル調のペンキで色を塗った。

の前で言えること」と、梶岡先生は続ける。

鑑賞会は、部の一員であることの自覚とともに、他の部員の活動へ向ける意識をも促しているようだ。

## 廊下に浮かぶ存在感

美術室前の廊下の壁には、色彩豊かで自由なポーズをとる人影が描かれている。ジャンプをする影、バットを構える影などさまざまあり、昨年、美術部員が共同で制作したものだ。自分たちでアイデアを出し合って、ポーズをとった人物の写真を実物投影機で壁に映し出し、それをトレースして制作するのだという。

過去、同校の選択の授業で行われていたこの影の制作（『美術 2・3 上』教科書 P 12 にも同様の作品を掲載）。「自分たちもやってみたい」



左／部員が多く、美術室では手狭なため、廊下を使って制作に励む。  
右／文化祭の美術部展に出展するため、大きな作品を共同制作する 1 年生。



撮影 鈴木俊介

という声が上がリ、美術部の存在感を浮き立たせるようなこの壁画の完成となった。「校内で『誰がつくったの』と注目されて、『私たちだよ』と誇らしい気持ちになった」と話す部員。教え合い、ともに活動する美術部がここにある。

# 野外造形展は楽しい

## 造形「さがみ風っ子展」

神奈川県相模原市で、  
毎年秋に開催されている造形「さがみ風っ子展」。  
市立の小・中学校の児童や生徒の作品を中心に展示するほか、  
飛び入りで制作を体験できる造形コーナーも設置され、  
毎年多くの人が訪れます。



大きなアスレチックや、  
広い芝生の広場がある  
淵野辺公園。野外造形

展の期間中は、多くの人々が来場し、  
にぎわいを見せる。地域に定着した  
造形「さがみ風っ子展」。スタート  
したのは 1979 年のことだ。第 1  
回の会場となった広場は一面が雑草  
に覆われていたため、教師が総出で  
草刈りをするところから作業が始ま  
ったという。まさに教師の努力によ  
って生まれた造形展といえるだろう。  
今では、市内の恒例行事となり、昔  
出品した子どもが大人になり、自分  
の子どもを連れて来場する姿も見ら  
れる。

野外造形展の大きな  
特徴は、展示の環境だ。  
公園内の林に生えてい  
る木々に作品を結び付  
けたり、木の棒やつる  
など自然の素材でつく  
った作品を、直接地面  
に置いたりといった、  
室内ではできない展示  
が可能になる。どんな  
大きさの作品を、どん  
なやり方で見せるのか、

そこが野外造形展での子どもと教師  
の腕の見せ所だ。また、ふだんはつ  
くることができない大きな作品をつ  
くるチャンスとあって、共同制作に  
取り組む学校もある。一つの画面に  
向かってクラスで力を合わせて描い  
たりする過程で、きっと子どもどう  
しの絆も深まることだろう。

現在では、大学生などを中心とし  
たボランティアが造形展をサポート  
している。また、野外の展示とあわ  
せて、女子美術大学アートミュージ  
アムにも作品が展示される。地域の  
力を原動力に、造形「さがみ風っ子  
展」はこれからいっそう盛り上がっ  
ていくことだろう。



ダイナミックな展示ができるのも野外造形展ならではの。

# 放 課 後

第 2 回

# A R T





写真 アフロ

第 2 回

## 「ラスコー洞窟の壁画」

前1500年頃 フランス

### ラスコー訪問記

フランス南部、満々と水を湛えて緩やかな流れを形成するドルドーニュ川の流域に、レゼジーという小さな村がある。パリから列車を乗り継いでおよそ5時間、かの有名なラスコーの壁画にも近い有名な地域なので、もっと大きな街なのかと思っていたが、着いたのは無人の駅舎だった。村は歩いてまわれるほどの広さしかなく、どこにでもあるような南仏の田舎町といった風情である。他の村と唯一違うのは、濁った川と並行して石灰岩の岩山が垂直な壁を剥き出しにしながら、どこまでも続いているということだ。

ドルドーニュ川沿いにできた天然の岩棚は、もともと原初の住居として機能していた。氷河期にはマンモスが、そして暖かくなるにつれて馬や鹿、ライオンなどがあたりを徘徊し、やがて人間もこの地で生活を営むようになる。岩にえぐられた横穴は、最初に移り住んだ人類にとっては雨風をしのげる格好の住み処だったのだろう。以来、数万年にわたってその空間は更新され続け、現在も形をかえて人々が暮らしている。

ぼくが訪ねたのは夏の盛りだったが、日本のように湿気もなくて過ごしやすかった。周辺には、数万年前に遡る洞窟壁画群が残され、人類の古くからの居住空間は「岩棚住居」として、人々の暮らしに溶け込んでいた。かの有名なラスコー洞窟の壁

画も、レゼジーから多少離れてはいるが、似たような風土のなかにあった。ただし、今は保存のために実際の洞窟に入ることはできない。ぼく自身、どうにか許可を得て本物のラスコー洞窟に入ろうと画策したのだが、まったくとりつく島がなかった。他の洞窟も、入ることはできても撮影は許されていない。

ぼくのように現地まで行ってガッカリする人を怀柔するためか、人の手によって作られた「ラスコーⅡ」という、本物と寸分違わないレプリカ洞窟が近くに作られている。当然ぼくはここに入ってみた。たしかにラスコーの構造や雰囲気はわかった。が、これはあのラスコーとはまったく似て非なるものであり、ややもすると遊園地のアトラクションとなんら変わりが無いのではないかと思えてくる。

レプリカの「ラスコーⅡ」を出ると、午後の柔らかい光がぼくを包んだ。ドルドーニュ川の岸辺でいつまでも昼寝をしたくなるような優しい光だった。クロマニヨン人がこの地に腰を落ち着けたのも、当然の選択だったと思う。本物のラスコーは見られなかったが、ラスコーを生み出した人々が触れたそのままの大気にぼくは触れている。太古へ遡る想像力の翼が一気に広がった。そのときぼくは、教科書に出てくる本物のラスコーの一端に確かに触れたのだと思う。

石川直樹  
いしかわ・なおき

写真家。1977年東京都生まれ。2000年、Pole to Poleプロジェクトに参加し、翌01年に当時の世界最年少世界七大陸最高峰登頂達成。04年には熱気球で太平洋横断に挑戦し、そのルポルタージュ『最後の冒険家』（集英社）で開高健ノンフィクション賞を受賞。11年に『CORONA』（青土社）で土門拳賞を受賞。『NEW DIMENSION』（赤々舎）では、世界に点在する洞窟壁画を撮影。